

授業ノート：『*Essential Academic Skills for University Research: A Historical Studies Perspective*』の刊行に寄せて

ジャスティン アウケマ

はじめに

2023年3月に主に日本の大学生向けに研究過程に必要な基礎能力や歴史研究で使われる基本的な手法を教える教科書として『*Essential Academic Skills for University Research: A Historical Studies Perspective*』（大阪公立大学出版会）（以後『*Essential Academic Skills*』として省略）が刊行された。およそ200ページに及ぶ内容は英語で書いてあるものの、基本的な研究手法や能力が中で紹介されているため、日本語で行われる研究を含めて、多様な専門領域に幅広く応用できると考えている。なお、教科書の刊行にあたって大阪公立大学経済学部の機関紙である『*経済学雑誌*』の御厚意によりここで教科書の内容紹介、及びこれまでの利用方法について詳しく述べる機会が与えられた。従って、本稿では第一に教科書の執筆に至った経緯、第二に教科書の内容と利用方法、そして第三に学外学習での利用方法や筆者以外の大学教員による利用した経験について順番に触れていく。

第一章：執筆に至った経緯

『*Essential Academic Skills*』は主に二つの目的を掲げている。その一つは、大学生向けに研究における基礎的な能力を教えることである。そして二つ目に、歴史学研究の基本的な手法を習得させることである。これらの目標は、また、筆者のこれまでの教育と研究を反映したものである。筆者の専門は近現代日本史だが、長らく日本の大学で英語教育にも携わってきた。そしてその期間中に筆者が利用する歴史的資料や課題を簡単な英語表現で説明する必要がある場面が多々あった。加えて、英語教育や歴史教育に共通した、必須スキルである研究の基礎及びレポート執筆の基本を共に学生に伝えることも重要であった。

これらの経験を背景として、2021年4月から新たに大阪公立大学（旧名：大阪市立大学）の経済学部に着任し、一年生向けの授業を担当することになった。コロナ禍の最中だったため、

全ての授業はオンラインとなっていた。その中で、15名程度の一年生向けの「基礎演習」という授業があり、筆者が目指す研究手法の基礎教育に最適の内容と思われた。しかし、授業を対面でできないという、これまで直面したことがない大きな壁があった。本来なら、筆者が持つ授業内容は学生を中心にし、学生に積極的かつ主体的な参加を求めてきたものであった。授業の中では、実際にアーカイブを利用したり、一緒に資料を分析したりすることもその一つの柱となっていた。しかし、これが容易にできない中、筆者は新たな教育法を探っていた。そして、簡単でありながら、その解決策の一つとして以前なら授業で口頭で話した、講義内容を今度は活字による文書へ変えることに決めた。そしてその時まで、当たり前に行っていた「研究手法」に関する情報は、目の前にページの上に見えるような形になってきた。「トピックの選定」や「資料の探し方」など、研究過程の最初から最後までありとあらゆるパーツがそこに揃ってきた。このようにしてごく自然に今回の教科書『*Essential Academic Skills*』が現れるようになった。さらに、その過程の中で、過去10年間分の以前から使ってきた教材の編集、及び自分の研究体験からの事例や見本を多用した。

「基礎演習」は2021年に終了した際に、のちに『*Essential Academic Skills*』の基となる原稿が出来上がった。さらに、実際に授業で試した結果もあって、ある程度その効果や成功事例が見通せることが出来ていた。その全てに関してここでは述べる時間がないが、以下に学生がレポートで決めたいいくつかの課題テーマを紹介したい。

- ☆ コロナが日本の教育現場に与えた影響
- ☆ 企業文化と「多様性」に関する研修
- ☆ 17世紀日本における宗教論争
- ☆ 愛媛県の水産業について
- ☆ 日本のアニメの歴史
- ☆ 神武天皇の歴史性にまつわる論争
- ☆ 金本位制の歴史的経緯と採用について
- ☆ 日本漁業の歴史について

その中で、比較的良いものと、そうでないものがあったことは、もちろんである。しかしこれらの研究課題を紹介したのは、それぞれの個別的な質を示したいというより、だんだん具体化してきた筆者の教科書が既にこの段階で複数の多様性のあるテーマやトピックに対応できていたことに注目したいからである。そしてこれに関して、その翌年にさらに教科書の原稿を発展する中で、対応可能な学生の課題テーマがさらに増えていたことも、一応、確認しておきたい。

2022年にコロナ対策が緩和され始めた後、新たに対面で教科書を実践することができた。そしてその機会を与えてくれたのが、同じく一年生向けの「初年次ゼミ」だった。一年前から

電子ファイルで用意した原稿を、大学生協で簡易製本と印刷を頼み、その A4 サイズの約 70 ページのものを学生に配布した。初年次ゼミは新たな試みで、大学の各学部学科から、つまり専門を問わず 20 人程度の学生が同じゼミに集まるという形となっている。理系と文系の学生が共同で受ける授業として、及び研究の基礎を教えるのが目的であるこの授業は、従来までの筆者の英語を教える経験とよく共通していた。また、筆者の専門である歴史を遥かに超える、多様性のある授業内容にする必要があると強く認識した。

幸いにして、研究基礎と歴史学手法は独創的な普遍的な魅力と応用性があることを理解した。全ての学部では研究を実施し、レポートをまとめる必要はある。同様に、論理的な立論の仕方とレポートの構成の仕方も、また共通している。例えば、自然科学で実験の前に立てる仮説は、人文社会系における主張に似ている上、同じく証拠と具体例で立論しなければならないこともある。さらに、歴史という分野は幅広い魅力と用途を持つ。全てに歴史がある。経済史もあれば、科学史や哲学史もある。したがって、医療に興味を持つ学生は、ある病に対する歴代的な治療法の発展とその変遷について調べることができるし、また、教育に関心がある学生は過去の教育法を探求できる。このようにして、「歴史」といった共通の観点から諸問題を分析することにより、学生が自らの興味のある分野を研究しながら、筆者は教員として自分の専門に基づいた指導が出来た。

かくして 2022 年の初年ゼミが、爽りある形で終了した。そこで用いた詳しい方法についてまもなく触れるが、まず学生が選んだ研究課題のいくつかを以下に紹介したい。

- ☆ サウナ治療の医学的利用方法
- ☆ 宮崎県における観光業
- ☆ 経済学から見た日本の少子化問題とその影響
- ☆ 花粉症とその主な治療方法について
- ☆ 福井県における少子化・過疎化とその原因要因
- ☆ 18歳まで選挙権の引き下げとそれにまつわる論争
- ☆ 2010年代における任天堂のビジネスモデルとその評価
- ☆ 日本の小学校における読書教育の現状分析

この表からわかるように、一年前に比べてずいぶん多様性に富んだ課題となっていた。さらに特に注目したいのは、『Essential Academic Skills』は、筆者の専門分野から大きく逸れずに、複数の専門分野にわたるテーマに対応することに十分に成功した。従って、医学部・理科学部の学生は、例えばサウナを用いる治療法や花粉症とその治療に焦点を当てることが出来ていた。同時に、少子化や地方政治といった政治経済的な分析などもあった。しかしどの課題にしても、共通点としては歴史という観点到に重きを置いたことがある。

ここまでくると、『*Essential Academic Skills*』のおおよそは出来上がってきた。一方、初年ゼミを受けてまだ不十分な点に気づくことができた。中では、例えばレポートの書き方や歴史手法という、実用的な能力よりも、研究に関わる「概念」の説明はまだ少ないように感じた。例えば、学生は新聞記事の探し方は、ある程度理解していたものの、深く批判的に分析するコツが不十分だった。果たしてニュースとは何か。その目的は何だろうか。また、その強みと弱みは何か。これらの質問に答えを出さなければならなかったのである。加えて、特に理系と社会科学系の学生が共に受けた初年ゼミで明確になったが、「科学」の意味とあり方にまつわる疑問も残っていた。科学とは果たして何であろう。それぞれの科学分野の架け橋となる枠組みはあるのか。さらに、「理論」にまつわる問題が浮き彫りになってきた。学生のレポートには強い主張があって、論理的な構造と構成にもなっていたが、まだ問題の全体像に対する理解がなかなか見えてこない。一例を挙げると、労働問題と労働者の権利に関する問題の多くは、資本主義経済に内在する構造的要素に由来することが多い。しかしこれを理解するには、マルクスを始め様々な理論家の文献を読まざるを得ないだろう。これは決して簡単なことではない。しかしたとえ簡単なレベルであっても、いずれ必要になるだろう。そのため、何らかの形で理論の使い方について学生に伝える必要があると考えた。結局、これらの三点、ニュースについて、科学について、そして理論については、それぞれ教科書の最後の三章になった。出来上がった目次は次のようなものである。

Table of Contents

Introduction to the text	8
<i>Part I: The Research Process</i>	
Chapter One: Choosing a topic	15
Chapter Two: Introduction to historical databases and sources	19
Chapter Three: Making a bibliography	29
Chapter Four: Drafting a research proposal	34
Chapter Five: Conducting a literature review	42
Chapter Six: Analyzing historical sources I	48
Chapter Seven: Analyzing historical sources II	58
Chapter Eight: Historical sources: image analysis	74
Chapter Nine: Crafting an argument	86
Chapter Ten: Formatting the report	94
Chapter Eleven: Citing sources	105
Chapter Twelve: Making a presentation I	113

Part Two: Critical Thinking Skills

Chapter Thirteen: Understanding bias in science	130
Chapter Fourteen: Reading the news.....	135
Chapter Fifteen: Using Theory	145
Appendix 1	159
Appendix 2.....	160

最後に残っていたのは、原稿の最終的な準備だった。しかしその前に、さらに一つ付け加える内容もあった。中では、主に参考文献のおさらいの仕方について、のちに第五章となった補足はあった。授業及び教科書では、歴史学における一次資料と二次資料の違いと重要性についての話がある。二次資料は、現代の時点から書いた論文や本で、いわゆる先行研究である。これらの資料を読んでおくのは不可欠であって、一次資料の分析が始まる前から抑えておく作業だといつも学生に伝えている。研究課題（トピック）の選定の次の段階としては、その同じトピックについて既に論じられてきたことを学ばなければならない。当然、一人の教員として筆者はこれらの全ての情報を提供することは出来ない。多くの場合、唯一できるのは、どこでどうやって資料収集と分析ができるかについてである。しかしその後の調査は学生本人の動力次第による。二次資料の中では、特に最近書かれた代表的な書籍、学術書の一冊や二冊をもってすることを推進している。もちろん学術書でなくても学術雑誌でも良い。いずれにしても、学生はこれらの二次資料を読んだ上で、自分の研究を始めるための十分な情報を持つと期待している。一方、先行研究を読んでおく意義は情報を得るためだけではなく、自分が選んだ研究課題について、既に論じられたことと、未だ論じられていないことを把握するためである。これに関して、学生自身の研究をより広い先行研究という文脈に位置づけるためには、特に後者の方が重要だと考えられる。「誰々氏は以前、何々を論じたが、本論文では筆者は何々（違うことや観点）を述べていく」。これは、筆者が学生に勧める基本的な雛形である。

先行研究の読後に関連する章ができたなら、次に出版社を探す段階に入った。『*Essential Academic Skills*』は筆者が担当する授業や研究経験から自然に生まれたため、筆者が勤務する大学の出版会、大阪公立大学出版会（略：OMUP）は自然な選択だった。OMUPに頼んだおかげで、手厚いサポートとアドバイスを頂くなど、多くの利点があった。一方、非営利活動法人であるため、出版に必要な経費は全て自分で確保する必要があった。そのため、第一刷には、わずか90冊しか出版できなかった。今後、第二刷を目指してさらに出版部数を増やすことを期待している次第である。とはいえ、それにもかかわらず既に第一刷目が本学を超えて京都大学や早稲田大学で使われていると聞き、アマゾンジャパンにも販売されている。他の大学

教員が他大学で『*Essential Academic Skills*』を使った体験やご意見などについてはまた触れていきたい。しかしその前に、まず本教科書の内容とその利用方法について、もう少し詳しく見ておこう。

第二章：内容と利用方法について

既に確認しているように、本教科書の内容と構成は、第一章でトピック（研究課題）の選定から始まるように、研究過程の流れを反映したものである。さて、授業で本書を使うときに、いきなり研究課題を決めなければいけないことに驚く学生は少なくない。多くの場合、学生は授業の最初だから椅子にくつろぎ「講義を受けるだけだろう」と受け身的に考える学生がほとんどだろう。しかし私の授業、そして本書では、これは通用しない。一方、確かに手柔らかにその過程に慣れさせ、トピックについて考える時間を少し与えるのも大切である。そこで学生に良いトピックに気づかせるために誘導する必要がある。中には、例えば最近新聞で読んだことについて考えることがある。もしくは、新聞をあまり読まない（その方の可能性が高い）なら、実際に新聞や雑誌を読んでもらうことを勧める。しかしそれに関する一つの危険性は、やはり近年のネットニュースによるアルゴリズムや、テレビニュースの非常に限られた話題性の高いもののみを取り上げる、以前からあった傾向により、実際意味のある、かつ研究する重要性が高い話題は、確かに少ないように思われる。これを避けるために、私はできるだけ身近な話やトピックに選ぶことを学生に進めている。実際に、例えば地方紙を読むことがとても効果的で、全国紙よりも意味のあるテーマが多いと思われる。なにせよ、時間的にも地理的にも学生自身から遠く離れているトピックであるほど、深く調べることは、やはり難しいだろう。

トピック選定が一旦終わると、次に私はそのトピックにまつわる「範囲」、とりわけ「時間」と「場所」を決めさせる。つまり、自分のトピックについて「いつ」と「どこ」のトピックを研究したいのかということである。これらのことを最初から学生は忘れがちだが、私は絶対に決めるべきだと考えている。次の第二章にもその理由が明確になると思うのだが、とりあえず結論からいうと、程よい「範囲」を決めないと資料が少なすぎる、もしくは、多すぎるという問題にぶつかり、研究が進まないことが多いからである。そして、この「範囲設定」にまつわる一つの例を挙げると、例えば学生が「日本における宗教」を調べたいと言い出すとしよう。しかし歴史学において、特に学部生にとっては、多くの場合に「日本」という国単位はまだまだ曖昧で広すぎるので、やはりこれは修正すべきである。また「宗教」に関しても、ほぼ同様なことが言える。よって、例えば「明治期における奈良県〈天理教〉」というように改めれば、綺麗に「場所」と「時代」にまつわる問題点が解決され、かつ割と身近にあるため、資料や情報が収集しやすいと考えられる。他の例を挙げると、学生が「女性労働者」というトピックを選んだ場合に、同じように時間と地域的な範囲を特定する必要がある、例えば「日本における

〈主婦〉が受ける年金制度とそれにまつわる論争」というように改めることを勧める。

そしてここまでくると、「よし、じゃあ研究課題と範囲が決まったので、研究開始だ！」と思う人が多いだろうが、それはまだ早い。始める前にもう一つとても大事で必要な作業がある。それは「学術的問い」と「主張」を定めることである。まず「学術的問い」の方が少しわかりやすいので、そこから始めよう。もっと簡単にいうと、「学術的問い」とは、研究課題について「知りたいこと」である。そもそも気になっていることや、関心がないと、研究課題にしないであろう。ピザは好きだが、何故好きなのかというのは、別に問いかける必要はない。しかし「貧富の差」について気になっているのであれば、当然なぜ貧富の差が生じるのかは知りたいだろう。良い研究課題であれば、このような質問が自然に湧いてくるはずである。さらに、歴史学の観点からいうと、「なぜある歴史的現象や出来事が起きたのか」という、つまり因果関係を明確にする問いは、もっとも古典的で基本である。学術的問いを思いつかなければ、早速研究課題を変えた方が良い。

しかし実は学術的問いは方程式の半分に過ぎない。その残り半分は「主張」である。私はいきなり最初から主張を考える指示を出すと、学生だけでなく、多くの人が驚く。「その必要は本当にあるのか」とか、「分析せずにいきなり主張は無責任ではないか」と、思われる。ただし、私はそこでまた質問する。自然科学で仮説を立てずに実験をするのか。やはり、それはしない。それだけではない。質問、つまり学術的問いできるというのは、ある程度解決策も一緒に考えられることも意味している。例えば日常会話の時でさえ、自分だけが周りの人の話に追いついていない時に、質問や確認をするだけで一苦労だろう。そして複雑な内容を扱う大学授業の講義であれば、尚更だろう。しかし、自分がある程度周りの人や先生の話をしっかり聞いていたら、例えばあまり詳しくなくても単純な質問はできるだろう。それは最低限の知識を得ているからである。実は主張を考える時も同じである。カール・マルクスは1859年にまさにこのことについて大変興味深いことを発言した。『経済学批判』の予言では、人間はすでに解決策がある程度わかっている問題しか思い浮かばない、というように書いてある箇所がある。これは彼の唯物史観にも繋がるが、簡単にいうと、例えば「貧困」を「問題」として捉えること自体は、やはり「これがおかしい、あってはならない」ということも意味し、その「あるべき姿や状況」、つまり貧困のない世界をすでに想像できているということである。いわゆる解決策である。

まあ、話がやや抽象的になってきたので、これに関してはここまでにするが、とりあえず授業で学生が学術的問いを決めた後に、「じゃあ、それはなぜ起こるの」と私が聞き、例えははっきりわからなくても「おそらく〜だと思おう」的な仮の仮説さえできればそれで良いことにしている。実際には、マルクスも、その仮説、あるいは解決策を明確にし、正しく導くために実存社会にしっかりと基づいた分析をしなければいけないとした。そして、まさにこういうことは第二章以降に紹介する研究過程が扱う内容である。

第二章は資料の検索の仕方と収集の仕方を題材にする。資料検索を始めると戸惑う学生は少ないだろう。しかし上述の範囲設定、つまり時間と場所がきちんとできていれば特に迷う必要はない。とはいえ、やはり次に出てくる問題は探す場所に関するのだが、大抵の学生は早速スマホをポケットから出し、グーグルで検索し始めるだろう。しかしこれはダメである。よって、最初から文系の一般的な日本語資料データベースである CiNii へ誘導しなければいけない。CiNii を使う時は、授業中にその場で学生個人のスマホやパソコンで調べさせている。大変良い文献データベースではあるものの、これに関しても注意が必要である。特に「検索単語」を賢く定めないと、膨大な量の資料、あるいは全くゼロの検索結果が返ってくる可能性が高い。よく耳に入るのは「先生、資料がない！」ということである。ただし、そのはずは絶対ない。日本における貧困についての資料がなければ、滑稽な話だろう。資料がないのではなく、検索単語を改訂する必要があるケースがほとんどである。もしくは、その反対のシチュエーション、つまり 14,236 件の検索結果が返ってくることもある。これはやはり検索単語の問題に間違いない。もしくは、そもそも検索単語が曖昧すぎるなら、きちんと範囲設置していない可能性が高いことが多いので、場合によっては一つ戻ってそれを先に改めなければいけないことが度々ある。

CiNii で検索したら次にどうするのか。まず検索結果を、学部生の場合には、25 件以内ぐらいにするのがベストである。もし 50 件でも 100 件でも出てきて問題はないが、100 件以上は多すぎる。そして、その中からもっとも関連しそうな文献を探したいわけなので、さっと検索結果一覧に目を通さなければいけない。すると、目安だが、学部生が使いこなせる程よい資料の量として本 3~5 冊と学術論文 5~7 本ぐらいがちょうどいいと思う。これ以上だと、特に普通の研究レポートの場合、多すぎる。

また、本に関してはできるだけ代表的なものにしたい。「代表的」とは何かというと、主に大きい出版会社や大学出版会から出た最近の学術書を指す。また、忘れてはいけないことは、これらの本と学術論文は全て二次資料、つまり先行研究であることである。今の段階で、学生は研究を始めたばかりなので、いきなり一次資料から始めてはいけない。もしそうした場合、おそらく混乱する。なぜなら、多くの場合に学生（研究者もそうだが）は一次資料を理解するための必要最低限の知識を持っていないからである。ほとんどの一次資料の場合、例えば行政文献や個人が書いた手紙など、書かれた歴史的背景について一切触れていないことが多い。しかし学者すなわち歴史家として、これこそ先に知るべき情報である。故に、一次資料を正しく理解し、その歴史的文脈に位置づけるために、先に先行研究や二次資料を読まなければいけないであろう。

さて、これらの資料をある程度確認できたら、次に文献リストの作成へ移る。そのために、私は Zotero という、無料のソフトの文献管理ツールを勧めているが、Endnote などのような他に良いものがいくつかある。また、学部生だから、わざわざ文献管理ツールを使わなくて良

いている者もいる。それでも結構だが、必ず何らかの方法で資料を管理保存したいので、例えばワードファイルで保存するとか、原始的な方法でも構わないが、やはり必ずした方がよい。

では、文献リストや見たい資料がある程度把握できたら、次は資料収集である。これは研究者として喜びの瞬間だが、残念ながら、多くの学部生はまだその楽しさがわからないため、少し誘導が必要になる。そして私の授業では、その出発点、収集プロセスは、大阪公立大学図書館（学情）から始まる。実際に教室を出て、全員を図書館へ連れて行くことは年に何回もある。図書館の使い方や細かい案内に関しては後に触れるが、とりあえず資料収集に関しては、事前に手に入りやすい文献を必ず確認し、図書館で確認した上で、貸し出しや印刷などという形で帰るようにしている。論文の場合は、他大学からの取り寄せ方法も有効的な方法だろう。また、このようにして例えば一回の授業、90分の図書館における収集時間が終わる前に、必ずもう一度学生に集まってもらい、見つけた資料について簡単な報告をさせる。このように、資料収集プロセスで実際に身についた、役に立つ情報を交換できるからである。

また、資料収集に関しては、もう一つ注目したいことがある。これは後に述べる分析にも関することだが、資料を収集してから次に読むわけである。そしてその時に、必ず各文献についてメモを控えることが不可欠である。これは様々な役割を果たすが、例えば、どの文献を既に見たかを記憶するためにもなるし、かつ後にレポート、特に先行研究の見直しをする時にすぐ役に立つ。

次は第三章についてである。第三章は第二章の直接の続きとして、参考文献リストの作成を紹介する内容である。ここでは、主に英語圏で使われる形式シカゴスタイルやハーバードスタイルなどが紹介されているため、直接的に日本語で書く場合には相応しくないが、その反面参考文献リストそのものは言語問わず応用できるので、広く普遍性があると考えている。資料収集と分析と異なり、これは主に形式に関わるものだから、楽しいというよりも、必要な地道な作業だろう。そして紹介するため、私の以前の研究の参考文献リストを見本にしている。場合によって、アクティブラーニング的な実践的な授業内容が適切と思われるが、その反面、一つの見本で済む時もある。参考文献リストは後者にあたるだろう。

第四章では、研究計画の作成の仕方について紹介されている。研究計画は実際には学生が自分の研究プロジェクトで初めて作成するものとして大変重要な役割を果たしているし、選んだ研究課題が適切かどうかを知らせるものだと考えられる。研究計画さえ執筆するのが一苦勞なら、畢竟自分の研究レポートはさらに混乱するだろう。研究計画の段階で戸惑う代表的な理由として、まずトピックや範囲（時代や場所）に問題があると指摘できる。これはこれまでの話にも繋がるが、結局資料の選択が適切でなければ、当然研究計画が薄っぺらくなるし、トピックが漠然としすぎて資料が莫大な量になってしまうと、それも書きづらい原因になるだろう。これらの問題が生ずる度にすぐにテーマを絞ったり、変えたりするように指導している。とこ

ろで、研究計画で必ず確認したいこととして、①テーマやトピックの紹介、②調べる意味や意義について、③先行研究について、④個人的に調べたい理由、⑤用いる研究手法と使う資料について、そしてわかればだが、⑥論じたいことや主張、という六つに注目する。実際には、これに全て均等に触れなくても良いが、できるだけ押さえておきたい。また、どれか一つについて比較的詳しく論じ、その代わり残りの項目を控えめに扱っても特に問題ないかもしれない。しかしそのいずれかをうまく説明できない、確認できないことがあれば、これは気をつけるべき点であろう。なおまた、⑥に関してすでにある程度触れたが、研究計画は暫定的なものであるように、主張も当然仮定的なものでも構わない。「こういうふう考えている」とか「こういうことを言いたい」とかという漠然とした内容でもよい。

第五章では、先行研究の見直しが取り上げられている。すでに述べているように、これは資料収集に次ぐ段階としてもっとも論理的な作業である。もちろんこれはポケモンではないので、「ゲット」だけでは足りない。収集した後に実際に読んで分析しなければいけない。なお、読むこと自体はかなり時間を必要とするため、そのタイミングについて一事で言えないが、一応、研究計画を執筆する段階に当たりすでにある程度先行研究に触れているとベストだと思う。特に、先に述べたように、代表的な研究、とりわけ学術書や本を二、三冊から始めるのが便利である。そして、先行研究を含めて資料を分析するときに、必ずメモを控えることを学生に勧めている。実はこれが研究レポートの秘密だが、きちんとしたメモ、つまり資料の内容の要約と自分の感想や批判などを記録しておけば、これが後のレポートの主な内容と中身に変えることができ、あっという間にレポートが出来上がるという、便利なことである。実際には、先行研究の検討自体はレポートの冒頭、もしくは第一章の歴史的背景とともに位置づけることを誘導する。あるいは、特に先行研究と自分の研究の違いを強調したい時には、例えば独立した第二章でもできる。しかしいずれにしても、先行研究を確認したい理由は自分の研究の意味や意義、独創性に着目するためである。そして、レポートでまとめると、またもっとも重要な先行研究を選び、その一冊の内容を要約し、その趣旨や意義を確認し、さらにもしあればだがその不十分な点についても述べ、更に研究する必要がある点（つまり自分の研究）について確認できると一番良い。それで、その一冊に対する全体的な長さは一つや二つ程度の段落で丁度良いのではないだろうか。なお、『*Essential Academic Skills*』の45頁では、私が以前作成した先行研究の検討が見本として参考になると思う。ちなみに、授業では研究計画の後の次にこの先行研究の見直しを提出してもらうことにしている。

第六章から第八章までは、史料の分析方法をテーマにしている。史料分析はこの教科書及び私が担当する授業の肉と骨と言っても良い。研究レポートの質は、結局のところ参考資料の質で決まるため、その資料収集と分析は、ある意味で、レポート執筆よりも大事だろう。そのため、第六章は最初に使うととても便利な史料の一つとして、地域史を調べるには欠かせない市史や県史（府史）を紹介している。厳密に言えば、市史や地域史資料は一次資料ではないケー

スや使い方が多いが、トピックの歴史的背景を理解するには不可欠である上、使い方によって、例えばよほど古いものであったり、もしくは歴史認識を研究する場合に、一次資料として扱う時もある。市史が持つもう一つの面白さは、市の中央図書館や県立図書館で書蔵されていることが多いので、利用するには大学や自宅を一旦離れる必要がある。後ほど歴史文書館について紹介するが、例えばそのような文書館まで行くには少しハードルを感じるとしても、少なくとも県立図書館などはアクセスしやすい。また、この一環として私の授業ではこれを教育するいい機会と考えており、学生を連れて一緒に県立図書館まで見学することは度々ある。また、第六章で紹介されるもう一つの比較的使いやすい史料は機関史 (institutional histories) 及び社史 (business histories) だ。機関史や社史では、その機関や組織、会社などについての他の資料で書かれていない内部情報と見解が記されているため、特に社会史や経済史という分野でとても貴重な資料とされている。一方、機関史や社史はほとんど自己批判や反省などをしないため、偏見 (bias) に注意すべきことを学生に伝える必要がある。

史料の収集と分析方法の続きとして、第七章では新たなアーカイブと資料の種類を紹介している。特に、オンライン公開されている、近代デジタルを含む国会図書館が所蔵する資料、及び様々な議事録と昔の新聞が中心資料となっている。まず、国会図書館が運営する簡単にオンライン検索できる近代デジタルの資料について紹介されている。国会図書館のオンライン公開資料がこの二、三年に大きく変わり、*Essential Academic Skills* を書き始めた当初よりもさらに使いやすくなった。近代資料のデジタル化は、以前より主に幕末期から戦後直後までの日本語資料 (雑誌や本など) の多くや、著作権が切れたものがネット上で公開され、自宅からでも簡単に閲覧できる。これは歴史学では欠かせないデータベースなので、一次資料の収集に関してこれを初めから学生に勧めている。そして第七章では、その利用方法を学ぶには、私の専門に近い、日本の占領期からの進駐軍関係資料を実際に使ってみる。授業中にオンライン資料を利用する時は、学生が持つパソコンやスマホなどを利用するよう指示している。色々試した上、もっとも簡単だからである。そしてスマホ等からアクセスした上で、次に資料検索で日本の占領期からの一つの重要文書である、1945年12月の「Shinto Directive」を探すように誘う。このやり方の全ては、第七章の61-62頁に書いた。「Shinto Directive」は国家神道の解体を命じる文書として、進駐軍がどのように日本の戦争責任を捉えたか、及び戦後日本における政教分離について知る上で、大変貴重な資料である。しかしこれらの歴史的背景、及びこの文書の重要性を理解するには、まず分析した後に、教員が示す質問 (教科書の62頁) を尋ねる必要がある。進駐軍関係資料に加えて、もう一つのアクセスしやすい重要な資料は様々な議事録である。教科書では、例えば63-66頁では沖縄県会議議事録や国会議事録を取り上げている。どれもネット上で一般に公開され、特に政治経済史の分野で興味深い資料が豊富にある。さらに、教科書では紹介されていないが、戦前日本の帝国議会議事録もあり、全て自宅から簡単に検索と閲覧ができる。そして第七章で紹介されている、三つ目の史料の種類は昔の新聞で

ある。昔の新聞は過去を知るには欠かせない資料であり、特に長い歴史的なスパンにおける変遷を明らかにするために重要である。すでに教科書の24頁に『朝日新聞』などの全国紙のデータベースについて触れたので、第七章ではより一層身近な地域の新聞、つまり地方紙に着目する。特に私は以前利用した『京都日出新聞』（戦後一旦廃止となり、のちに『京都新聞』として再刊）がそのために使われている。このような昔の新聞は、場合によって私たち現代人とは全く異なる感覚と観点から物事を捉えたり、描いたりしているので、学生には時々ジョッキングな経験になる。また、現代ではほとんど忘れられているが、当時新聞の一面で大きく報道されていたニュースも多々ある。これに加えて、昔の新聞を授業で利用する方法は様々あるが、例えば当時の言葉に触れる練習として授業で音読することもでき、また、データベースの利用の仕方がわかったら、学生自身が一つの記事を探して授業で内容を報告することもできる。

しかし史料には活字だけではなく、画像のような視聴的なものもある。第八章では、その一つとして絵画と写真が取り上げられている。「百聞は一見に如かず」という表現があるが、これは正にそうである。それを表すため、例えば77頁に私の以前の研究から、京都の近代史を明確にする一つの驚きの写真がある。詳細は教科書に書いたが、単純に説明すると、京都市は先斗町という地域を「元通り」の復元を目指す政策の一つとして電柱を撤廃したが、先斗町自体は明治時代から栄え始め、当時の写真を見れば、最初から電柱が「近代の象徴」として誇らしく立っていたことがわかる。正に写真が明らかにする、現代人の固定観念と過去の実際の隔たりに他ならない。さらに、85頁から私が授業でよく利用してきた、マサチューセッツ工科大学が運営する Visualizing Cultures というデータベースについて書いてある。数多い日本の近代史の版画や石版画、絵画や写真がネット上に一般公開され、重要な資料館となっている。画像のほか、歴史家が丁寧に書いた、歴史背景に関する解説もあるので、学生にも利用がしやすい。

第九章は史料から一旦遠ざかり、レポート執筆における、最も難しい点、すなわち独創的な主張を形成することを取り上げる。すでにこれについて多少触れたので、ここで詳細には述べないが、しっかりした主張がないと論理的なレポートを書けない。最も簡単な論理的構成としては、「発言→理由→証拠」となっており、この構成に沿ってレポート全体を書くのだが、その最も重要な発言となる主張がないと、理由と証拠を示すことさえ困難となるだろう。さらに、研究を始める動機として、解決したい学術的問いがあるはずだが、その回答として確固たる主張がなければ、最初から学術的問い、つまり研究する目的が欠落していることになる。また、主張はレポート構成全体に関係するため、その構成全体をある程度把握した上で、位置付けることが重要だろう。それを学ぶため、93頁に「Structure of the Research Paper」と題する、レポート全体の構成の雛形を示した。「全体のレポートはこんな感じだよ」という、一般論として書いてあるが、これは短いレポートから卒業論文という長いものまで応用することができる。

第十章、「Formatting the Report」は前の章で紹介した続きとして、主張とその後のレポート内容を連結する方法を紹介する。これは上述のように、「発言→理由→証拠」という論理的

思考を通して行われる。言い換えれば、研究レポート全体は、それを貫く主張を裏付けるための理由と証拠として構築される。もちろんこの論理的思考の方程式を、節ごとや段落ごとにも利用することはできる。しかしその場合でも、各節や段落は全体的な主張に関連させ、裏付けなければならない。さらに、最も重要である独創的な分析は、主張を明確にする証拠を主に論ずることを目的すべきことは言うまでもない。

次には、多くの学生が忘れがちな出典を明記することが第十一章で取り上げられている。特に学生がよく迷うのは、いつどのように出典を明記すべきことや、具体的にレポートの中どこに位置付ければ良いかということである。よって、第十一章は正にこういうよく間違えるところ、例えば直接・間接的な引用の違いや要約することから説明を始める。一般的な規則として、どれかの資料を参考した場合、基本的に出典を明記すべきである。そして直接的な引用がある場合、引用が入る文書の区切りの前に脚注（私は脚注を用いる）を挿入する。また、間接的な引用は要約した場合、その文書、又はその段落全体の最後に脚注を入れると良い。加えて、同じ文献情報は頁下の脚注だけでなく、レポート最後に纏められる参考文献リストにおいてもアルファベット順で記入すべきである。もちろんその他にも、色々と細かい異なるケースも予想されるが、基本はここまでである。詳細は実際のワードドキュメントを想定した画像などで示されている（108-109頁）。

参考文献リストをまとめる段階まで進んでいけば、実際にはレポート執筆自体がほぼ終わっていると考えて良い。その理解をもって、次の第十二章でレポート完成後によく求められる、発表の仕方やスライド作成の仕方について紹介している。ところで、レポート執筆に重きを置いたから、その後の発表をやや控え目に扱う教員は少なくないだろう。しかし何の指導もなしに学生に発表をさせようとしても、おそらく上手くいかない。実際には、発表は執筆とは全く異なる能力であり、そのための適した指導が必要になる。執筆がどんなに優れていても、人の前に喋ることも優れているとは限らない。しかし幸いにどんな人でも発表能力を向上できる確かな方法はある。例えば、私はあらかじめ用意した原稿から読み上げる。そうすれば、話の本題から逸れたり、タイムオーバーしたりすることを上手く防げる。そして英語で執筆する場合、ダブルスペースで一頁を読み上げるには約二分かかる。同じように、パワーポイントを作成した場合、スライド一枚に対しておよそ二分かかると考えられる。聴衆からすれば、二分は長すぎず短すぎない。加えて、第十二章で実際のパワーポイント・スライドの種類が紹介され、また私が以前作成したスライドの見本が含まれている。その後、グラフや図表の仕方についても触れている。

ここまでで研究過程における実際問題や実用的・実践的な技術を取り扱う教科書の第一部が終わり、第二部では、研究の過程で出てくる、抽象的トピックに触れる。最初に第十三章では、科学における偏見について取り上げている。この章で私が最も強調したいのは、科学に純粋な「客観性」や科学的な考え方と実験方法は存在するが、同時に、科学的な知識は時代と共に変

化するということである。歴史家の私として、これは欠かせない理解である。科学的思想や知識の歴史を振り返ると、過去にほとんどの人々が100%真実や事実だと思っていたことは、今となっては事実とされていないことが多いのは一目瞭然である。しかしだからといって、全ては相対的で、実際の科学的な事実を知る術はないわけでもない。それにも関わらず、私たち研究者は客観的な事実を目指しながらも、その事実はもうしかすると一時的なものであり、いつか変わるという前提で受け止めなければならない。実際には、科学と宗教の主な違いの一つは、前者は自分の限界を認めて絶対に正しいと主張しないことである。つまり、科学は常に批判的で、常に実験し再実験している。この理解こそ科学的方法の源であり、私がこの章で学生に勧める方法である。

第十四章は似たようなトピックである、ニュースの理解の仕方を題材にしている。ニュースは正直に言って非常に問題的な、複雑なものである。第十四章では、ニュースに対して二面的なアプローチが紹介されている。一方では、ニュースは営利目的で偏見に満ちたものである。しかし他方では、時事問題や世界情勢を知るには、たとえニュースが全体を伝えなくても、ニュースに接する必要がある。そして、科学における偏見の問題の多くは、ニュースにも該当する。しかし結論から言うと、第十四章で紹介されているように、ニュースは歴史的に解説すべきものだと考えている。「歴史的」と言うのは、つまり歴史家が史資料を使うと同じように接することである。歴史家は、史資料から情報を得ながら、同時にその同じ資料に批判的な姿勢を保ち、一つの資料は一当事者の意見に過ぎないと常に理解している。そしてまさにこのようにしてニュースを接すればいいのではないだろうか。特にその中で、歴史家がよく利用する方法は、ある新聞記事やニュースの報道の仕方について長期にわたる変遷を捉えることである。科学的な知識以上にニュースの報道はよく変わる。たとえば一年前に報道されたニュースにしても、翌年全くそれが忘れられたように完全に異なる観点から報道されることはよくある。しかし、そのニュース資料を全部時系列的に調査すれば、このような杜撰な歴史認識の無さを改めることができ、より客観的な歴史的事実に近づくことができる。

さて、これまでにかなり実践的なスキルの上に重きを置いた『*Essential Academic Skills*』の最後の章に相応しい、学問における理論とその使い方に関する最も抽象的なトピックを扱う第十五章がある。実際に、一年生の場合、理論に入り込むのは到底できないが、三、四年生になると使い道はやや現れ、大学院生まで進むとなお不可欠になると考えられる。そもそもなぜ理論は必要だろうか。簡単に言うと、木から森を見渡せるからである。そしてこれを明確にするため、第十五章では、ニーチェやルフェーブル、マルクスなどといった、私の以前の研究で用いた理論家の三つの事例を紹介している。しかし理論といっても、様々な使い道があるため、ここで一つの授業からの具体例を挙げよう。学生の多くは1990年の日本におけるバブル期とその崩壊のような経済危機に研究する意欲を持っているが、そもそもなぜこういう危機が起こりうるか、どのように歴史的な経済危機が関連し合っているかは、少し見落とす傾向にある。

故に、これを理解するにはやはり危機にまつわる様々な理論に触れなければならない。ここで、私は資本の過剰生産や利潤率の低下する傾向など『資本論第三巻』で示されるマルクスの考えをしばしば注目する。この観点から、もっと現代的なデータと観点を取り入れれば、経済危機だけでなく、資本主義経済そのものに関する幅広い理解を得ることができる。また、このようにして、理論をもって実世界を理解するということは、マルクスが勧めた抽象から具体への移動、すなわち弁証法的実証方法である。

第三章：教室を出た『*Essential Academic Skills*』：実習的経験とフィードバック

第一節

ここまで、『*Essential Academic Skills*』の大体の内容を確認した。しかしそもそも教科書の一つの重要な目的は、授業で学ぶだけでなく、むしろ学生を教室から出してもらうことである。例えば、特に史資料に関する章では、紹介した歴史的資料館を利用するため、学生自身が実際に訪ねて資料収集することを勧めている。加えて、私の授業で次のように紹介する教育手法と活動を実施してきた。これらの紹介をもって、『*Essential Academic Skills*』の利用方法をさらに広げることを希望する。

第二節：アーカイブ訪問

大学生にとってはまず最もアクセスしやすい資料館の一つといえば、やはり大学図書館である。私の授業では、例えば CiNii で文献を把握した後に、必ずその中からいくつかをピックアップし、共に大学図書館に実際に閲覧しに行っている。さらに、このように簡単に検索が出てこない資料も図書館蔵書に入っていることが多い。その一つの例を挙げると、過去の卒業生が書いた卒業論文がある。私の三、四年生のゼミでは、卒論の指導をしているが、多くの学生は、特に最初に卒業論文に関して具体的なイメージがなかなか湧いてこない。そして私がいくらその構成や執筆の仕方について論じて、実物を見ることに及ばない。そのため、必ず年に一回、学生を図書館まで連れて先輩たちの卒業論文と一緒に見に行っている。このようにして、特に執筆過程の最初の方であれば、学生は卒業論文について、より明確に想像できるようになるだけでなく、実際の過去の成功例を見ることで感化されることも多い。しかし図書館を訪問しなかったとしたら、おそらく見ることはなかっただろう。一回の授業で卒論を見終わったら、再び学生と集まり感想を述べることも大事だと思う。

一方、アーカイブの多くは学外に所在することは事実である。地方の歴史を取り扱う、小さい資料館は歴史家から最も愛されているものの、大学生にそこまで訪ねてもらうのはハードルがやや高い。そのため、私は次に勧めるのは県立図書館である。県立図書館ならほとんどの場合、例えば『*Essential Academic Skills*』の第六章で紹介した市史や県史、及び社史や機関

史など様々な貴重資料を保管している。さらに、その県でしかアクセスできない地方紙もある。近年、例えば『奈良新聞』や『信濃毎日新聞』はわずかながらネット上でも利用可能となっているが、ほとんど最近のものに限られているので、古いものは中々見られない。そしてこれを唯一閲覧できるのは、大体その県の県立図書館である。また、多くのこれらの地方紙や、その他の昔の新聞などは縮刷版やマイクロフィッシュでしか見られないため、少しコツが必要になる。その練習も兼ねて、私は年に一度程度学生やゼミ生を大阪府立図書館へ見学に行っている。

第三節：博物館見学

図書館の他、学生が教室を出て『*Essential Academic Skills*』のもう一つの応用的利用方法は博物館見学である。その中では、よりよく過去のことを身近に感じられるため、地域の歴史博物館が特におすすめである。同様に、かなり実践的であるが所以に、科学技術の博物館や民族博物館も中々良い選択になる。私の経験から例を取ると、最近三、四年生のゼミ生と共に訪ねた大阪の造幣博物館への見学体験がある。訪問前の事前準備として、私たちは日本における貨幣の歴史について資料を読み、また、博物館のウェブサイトからアクセスできる資料を見せた。そして見学当日には、メモ帳とペンを全員に配り数時間で自由に博物館を歩きながら感想や見聞きしたことを記録した。このような博物館見学の時に、私は滅多に学生を直接案内せず、一人あるいは友人と一緒に自由に歩き、観察することを勧めている。そして見学時間が終わったら、もう一度集まり、感想やわかったことについて共有する時間を必ず設ける。さらに、次週の課題として同じ感想や学んだことを踏まえて一、二頁程度の作文するよう指示している。

図一：大阪造幣博物館の正面；2023年10月16日、筆者による撮影。



第三節

面白いことに造幣博物館のように、多くの歴史館や資料館の建物自体は当時からのもの、つまり歴史遺産である。そしてまさにそのように、史料は活字による文書だけでなく、有形的な「モノ」や歴史的な「場所」すなわち遺産でもその重要な種類でもある。また、過去を知るにはこのような歴史遺産は欠かせない、最も肌で実感しやすい場所である。なお、毎年小学生が広島や長崎へ修学旅行する、いわゆる平和教育と同じように、この方法はすでに日本がかなり馴染みのある形と考えられる。私も以前何度も同じように、例えば日本兵が様々な形で祀られ、または記憶されている京都や大阪護国神社という、第二次世界大戦ゆかりのある場所まで学生や一般社会人を案内したことがある。また、それらの遺跡見学の際に収集した資料や情報の一部は後の研究に大いに役に立ち、さらに『Essential Academic Skills』の第七章～第九章の中でもその一部を利用している。

第四節：フィードバック

ここまで、私は主に自分自身の教育法と経験について述べてきた。しかしこれはあくまでも一つの視点に過ぎない。この節では、日本の大学で『Essential Academic Skills』を利用してくださっている他の先生からのご意見と利用方法を紹介したい。

その中では、特に京都大学の所属のM教授からのコメントの一部を注目することにする。M先生は日本人学生及び留学生に主に歴史学や観光学、そしてアカデミック・ライティングを教えている。

「私の経験では『Essential Academic Skills』は、特に基礎をすでにマスターしている学部生やび大学院生にとっても役立つ。私が教える一部の学生は歴史が専門だが、その他の多くは専門が別であるため、この教科書は学部を超えて、3年次以上の学生や院生に参考になる内容だと思う。私が主にこれまで、この教科書を使ってきた授業は、アカデミック・ライティングの一般教養科目である。」

「詳しくいうと、例えばトピックの選定、学術的資料の収集、文献管理ツールの紹介と使い方、研究計画の形成、そして先行研究に関わる箇所は最も参考になる。時には、私は『Essential Academic Skills』から関係する章を、一週間分の読書課題にすることもあるし、授業で学生と一緒にテキスト内容を見ながら、私が特に強調したい点に着目することも多々ある。」

「私は補足説明が好きなので、その点では、『Essential Academic Skills』の各章の短さと簡潔さは、私には都合が良い。また、教科書の誠実な点、つまりどこで資料を見つけたり、どのようにそれを使うかということ、トピックとアーカイブの特定した具体例はもう一つの長所でもある。」

—M教授、京都大学

ここで注目したい点はいくつかある。一つは、本教科書は研究過程を初めて行なっている学部生だけでなく、上級者及び大学院生にとっても適切であると M 先生が話していることである。もともと大学一年生向けに書いたつむりの私にとっては、これはとても参考になる指摘である。しかし考えてみれば、これは確かに無理もないと気が付く。現在の大学教育では、基礎的なスキルは統一されていないため、大学一、二年生が取得する能力としてばらつきはあることを認めざるを得ない。よって、三、四年生となり、やっと卒業論文を書き始めるとき、未だ文書構造に関わる基礎に到達していないことも事実である。そのため、『*Essential Academic Skills*』で収録されている基礎能力は、大学生生活を通して利用される機会は十分にありと考えられる。さらに、基礎だからこそ、のちに取得する知識は上乘せられるように、大学院生や研究者になってもまだ使い道はあると思える。様々なレベルで使えると同じように、M 先生曰く複数の専門分野にも応用できる。まさにその意図で書いたため、これは特に嬉しい感想である。

また、M 先生は、本教科書が史資料に対して用いる実践的なアプローチを高く評価している。その中では、例えば歴史的資料館の具体例や史資料の探し方と利用の仕方が挙げられている。これに関して一つだけさらに述べていきたいが、これまでに歴史学を専門にしてきた私にとっては、「過去とは何か」とか「歴史学とは何か」などのような抽象的な側面から考えることが多く、詳細が細かくまで記載されている歴史的背景について読むことがほとんどだった。しかしその反面、歴史家が過去からの事実を掘り起こすために利用する際の、研究手法について直接教わってこなかった。むしろ多くの場合、これこそが重要にもかかわらず、ほとんど試行錯誤によって、自分で突き止めようとしてきた歴史家は私一人だけではないだろう。しかし考えてみると、これは非常に非効率的である上、肝心なところを抜かしてしまっているのではないだろうか。そのため、『*Essential Academic Skills*』では、まさにそういったアーカイブの紹介や資料分析方法と事例について述べようと思いついたわけである。

もう一つ M 先生が注目してくれたのは本教科書の使い方に関することである。M 先生は、本教科書を最初から最後までに使っているというより、注目したい箇所のみを読む課題にしたり、もしくは自分の講義を準備するための参考にしたりしていると話した。これはつまり、本教科書にかなりの柔軟性があると解釈できるのではないかと思う。もしそうだとすれば、本教科書の本来の目的の一つを達成できたと考えている。やはり教科書選定の時に、多くの教育者を迷わせるのは、そのテキストの柔軟性ではないだろうか。教科書やテキストの個性や主張があまりに強すぎると、教員自身がさらに提供したい情報や話題と合わなくなることは多い。そのため、自由に使える、縛られない教科書やテキストが好ましいとされる。これに関連して、M 先生は『*Essential Academic Skills*』の各章の長さは、この利用の仕方に最適とも指摘している。

終わりに

本稿は最近刊行となった、大学一年生に研究の基礎的なスキルや歴史学手法を教える教科書『*Essential Academic Skills for University Research: A Historical Studies Perspective*』（大阪公立大学出版会 2023年）を紹介した。私が本教科書を書いた理由と背景に触れた後に、各章の内容を詳しく見てきた。また、本論文の第三章では、『*Essential Academic Skills*』の授業内及び学外の実践的な利用方法のいくつかを確認し、さらに他大学で本教科書を利用している先生からのコメントも紹介した。本来なら、これに加えて私が担当する学生が書いたレポートの一部も紹介したいところだが、今回その紙面と時間はないため省略したい。

最後に述べたいのは、これからの大学における、本教科書を含めての研究基礎スキルに対する将来の需要と展望についてである。近年では、凄まじいスピードでAIやICTのような技術発展があり、必然的に教育にも大きな影響を与えている。この状況の中で、果たして基礎研究に対する需要はあり続けるだろうか。私はここで「絶対にある！」と断言したい。それはなぜかというと、AIは頭脳の労働の負担をいくらか軽減してくれるにしても、独創的な学問的問いを考えたり、また過去からの証拠や史資料を再検討したり、さらにそれをもって現代社会が直面する諸問題に応用したりすることは人間しかできないからである。そしてこれは文系でも自然科学でも同じはずである。いや、むしろ進む分業化や機械化によって、この側面こそますます明確になってきているのではないだろうか。例えば、近頃、自然科学や文系における盗用問題が話題になり、学問に大きな打撃を与えた。そしてその背景にある理由の一つとして、基礎研究や理念にしっかり基づいた理解を犠牲にして、その代わりに簡単に商品化できる「結果」ばかりを追求する資本主義的な圧力がある。それが故に、まさに今研究の基礎的なスキルや手法の重要性、及び科学におけるポテンシャルと限界を理解する上で、『*Essential Academic Skills*』のような教科書の役割は大きいと思う。

ところで、他の先生方から頂いた、たくさんのご意見の中で、本教科書は大学院生や現役の研究者にも参考になるという点にもう一度戻りたい。確かに、基礎だからこそ決して古びないという点では、これはその通りだと思う。しかし一方、『*Essential Academic Skills*』を大学一年生向けに書いたため、一部の内容は院生にも応用できるとしても、彼らに必要なスキルは残念ながら本書ではカバーできていない。もし本当にそういったスキルをさらに養いたいのであれば、やはりその続編が必要だと思う。しかし実際のところ、私はこのような院生や研究者向けの続編は今の段階で全く始めていないので、今後の課題としておきたい。